

▲▲▲「世紀のサミット」
▼▼▼

まさに「世紀のサミット」
鄧小平・ゴルバチョフ会談を頂点とする今回の中ソ首脳会談は、まさに「世紀のサミット」と呼ぶに値するものであった。しかも、中ソ首脳会談が行われている人民大会堂に而した天安門広場には、「民主化」を求める学生や市民のデモが渦巻き、彼らの「ペレストロイカ歓迎」のゆ

正論

東京外大教授 中嶋 嶺雄

過小評価すれば孤立化招く

をはるかに上回る長時間会談の密度とともに、きわめて大きな歴史的意味をもっていると言わねばなるま

外交の過去を清算し、いわゆる「新思考」外交によって今回の中ソ完全和解に導きつけたゴルバチョフ書記長の努力もさることながら、中国の鄧小平主席(党中央軍事委員)にとつては、まさに待望の歴史的瞬間なのである。

中ソ首脳会談の歴史的意義

であった。

鄧小平氏は中ソ論争の起源となったソ連共産党第二十回大会の「スターリン批判」を自撃した数少ない生き証人であるばかりか、一九六三年の中ソ両党会談決裂時の立役者であった。が、やがてソ連との全面対決を主張した毛沢東主席(当時)とたもとを分かち、その後の文化革命期の受難を経て、今日の非毛沢東化時代の導き、今回の中ソ首脳会談に至ったのであるから、胸中の思いは万感であったろう。

私は今回の中ソ首脳会談の期間、衛星テレビの解説を担当していたので、この三十年間、中ソ関係の推移を見つめてきた者としての臨場感を味わうことができたが、鄧小平氏を前にしては、世界のスター、ゴルバチョフ書記長も「老師」のまえの「学生」のような面持ちであった。

▲▲▲「新思考と新国際秩序」
▼▼▼

「新思考」外交、中国の「新国際政治秩序」認識を相互に肯定的に評価していることなどが、まさに当意の滴いものであった。中ソ和解のためには、まさに「三大障害」について

一つずつ障害を除去してきた。ソ連の「新思考」外交、中国の「新国際政治秩序」認識を相互に肯定的に評価していることなどが、まさに当意の滴いものであった。中ソ和解のためには、まさに「三大障害」について

「水爆船高(水位が上がれば船も高くなる)」との中国のことわざを引いた鄧小平氏が、中ソ関係に就いては「結束過去、開闢未来(過去を終らせ未来を開こう)」という言葉を引き出したと言わねばならない。

しかも、「三大障害」は「結束過去、開闢未来(過去を終らせ未来を開こう)」という言葉を引き出したと言わねばならない。



も、鄧小平氏が三年前にルーマニアのチャウシェスク大統領を通じてメッセージを託したのたいし、ゴルバチョフ書記長は八六年七月のウラジオストク演説でこれに応え、毎年

いずれにせよ、今回の中ソ首脳会談で、中ソ両党関係をきつめ、中ソ関係は完全に修復し、鄧小平氏は、みずからの責任においてみずから関与した現代史のドラマチックな一章を閉じたのである。

▲▲▲「日本は潮流に遅れるな」
▼▼▼

今後、中ソ両国は、社会主義の特性と基盤強化のために、他の社会主義諸国を含む、ゆるやかな同盟関係を形成しながら、相互依存・相互補完の関係を強化しつつ、西側との交流を深めることになる。二十一世紀に向けての社会主義の再生には、ゴルバチョフ訪中でさらに高まっている中国の学生反乱やソ連各地の民族反乱に見られるように、さまざまな困難を伴うであろうし、その前途は容易ではない。

しかし、中ソ両社会主義大国の今回の歴史的和解を、もしも西側諸国、とくに日本政府・外務省がタカをくくって、その意義を過小評価し、いとくすれば、国際政治の大きな変動のなかで、経済大国・日本がますます孤立化することになりかねない。日本外交には「新思考」や「新国際政治秩序」認識は不要なのであ

(なかじま・みねお)